飯田市中学生期の文化芸術・スポーツ活動連携協議会
第３回文化部会　次第

日時：令和５年10月２日（月）
会場：市役所C311～313

１　開　会

２　あいさつ（部会長）　(3’)

３　報告事項　(5’)
（１）7/31協議会の振り返り
・スポーツ庁・文化庁からの提言　参考資料１
・部活動地域移行を見すえた『めざす姿』～中学生のためのより良い文化芸術・スポーツ活動の場づくりのための取組の全体像～　参考資料２
・休日部活動の地域連携・地域クラブへの段階的な移行イメージ　参考資料３

４　協議　(55’)
（１）文化部活動の地域クラブへの移行に向けた令和６年度の取組（案）(10’)　資料１
ア　拠点校部活動の導入について
・拠点校部活動エリアモデル　資料２
R5部活動アンケート集計結果　別紙１
長野県地域スポーツ・文化芸術活動推進連絡協議会アンケート結果（情報共有）別紙2-1

イ　地域全体の文化芸術の振興について
・全市型クラブ（楽しむ場）の検討について　資料３
・飯田市の目指す移行モデル　資料４
・エンジョイスクエアについて（情報共有）　別紙2-2

〇質疑応答（10’）

〇意見交換
全市型クラブ（様々な分野にチャレンジする場）をどのようにして作っていくか　(35’)

５　アドバイザーからのお話　(10’)

６　その他、連絡　(5’)
(1) 今後の進め方について

・関係団体との協議	～11 月	校長会、各団体等との個別協議、推進計画検討
・協議会本部会	11 月 16 日(木)	推進計画(素案)提示、意見集約～12 月末
・協議会本部会(全体会)	２月中旬　※予定	推進計画案(案)提示、意見集約～3 月中旬
・推進計画策定	３月末　※予定	

(2) その他

７　閉　会

令和5年度　飯田市中学生期の文化芸術･スポーツ活動連携協議会委員

氏　　名	所属団体等	備　　考	本部会
飯野　雄一郎（いいの　ゆういちろう）	飯田市教頭会（鼎中学校）	文化部会	
今村　光利（いまむら　みつとし）	伊那谷研究団体協議会	本部会・文化部会	○
大澤　幸弘（おおさわ　ゆきひろ）	飯伊吹奏楽連盟事務局	本部会・文化部会	○
亀井　裕太郎（かめい　ゆうたろう）	飯田市公民館主事会（松尾公民館）	文化部会	
木田　敬貴（きだ　たかき）	NPO法人いいだ人形劇センター事務局	文化部会	
桑原　利彦（くわばら　としひこ）	ＩＩＤＡ　ＷＡＶＥ	文化部会	
塩澤　哲夫（しおざわ　てつお）	飯田文化協会	本部会・文化部会	○
下島　昌子（しもじま　まさこ）	下伊那合唱事務局	文化部会	
手塚　俊尚（てづか　としなお）	南信美術会（飯田市美術博物館）	本部会・文化部会	○
牧島　晃（まきしま　あきら）	学校法人コア学園飯田コアカレッジ	本部会・文化部会	○
三浦　宏子（みうら　ひろこ）	おもしろ科学工房	本部会・文化部会	○
山﨑　啓（やまざき　けい）	飯田市校長会（竜丘小学校）	本部会・文化部会	○
山﨑　久孝（やまざき　ひさたか）	飯田市PTA連合会(遠山中学校)	文化部会	
内田　総一郎（うちだ　そういちろう）	南信教育事務所飯田事務所指導主事	アドバイザー	

伊藤　弘	飯田市教育委員会生涯学習・スポーツ課長		
本島　秀勇	飯田市教育委員会生涯学習・スポーツ課長補佐		
樋口　晋哉	飯田市教育委員会生涯学習・スポーツ課主査		
賜　正俊	部活動地域移行支援コーディネーター		
白井　美樹	飯田文化会館		

会　議　録

会議の名称及び会議の回	第2回飯田市中学生期の文化芸術・スポーツ活動連携協議会　文化部会
開催日時	令和５年７月 31 日（月）　午後７時００分～８時４５分
開催場所	飯田市役所３階　C311-C313 会議室
出席委員氏名	別紙名簿
欠席委員氏名	今村光利氏、桑原利彦氏
傍聴者	なし
出席事務局職員氏名	生涯学習・スポーツ課　伊藤課長、本島補佐、樋口主事、賜部活動地域移行支援コーディネーター
会議の概要	以下のとおり

○協議・確認事項されたこと

①めざす姿（理念・モデル）とそれに向けた進め方について

・R７年度末までに、休日部活動はなくなる。

・将来的には平日部活動も地域へ移行を進めていく。

②生徒の主体性を引き出す活動イメージの共有

・地域との関わりが生徒の主体性を引き出す。

・生徒の参加が地域活動の活性化にも繋がる。

・文化系部活動の場合、「所属感」を求めている生徒が多く、「ゆるさ」が主体性を引き出すポイントになる。

１　開会　（進行：生涯学習・スポーツ課　伊藤課長）

２　挨拶　（塩澤部会長）

３　報告事項　（事務局　樋口主事）

（１）第１回飯田市中学生期の文化芸術・スポーツ活動連携協議会の会議録について

～事務局より説明～　　→補足・意見等なし

（２）これまでの進捗状況について　（賜部活動地域移行支援コーディネーター）

・学校、保護者、地域指導者の意識醸成について

中学校部活動運営委員会（5/2 鼎中、5/11 緑ヶ丘中、5/18 高陵中、8/1 旭ヶ丘中）

PTA 講演会等への説明（4/8 飯伊 PTA 連合会、6/11 下久堅小学校）

・先進地視察

7/11　千曲市への視察報告　　→補足・意見等なし

４　協議

（１）事例紹介

①事例発表

竜峡中学校美術部の活動紹介「地域との連携」美術部顧問：百瀬先生、南信美術会：手塚先生

～事例発表～

【百瀬先生より】

ア　竜峡中美術部について

（ア）部員数・様子

・全校 145 名のうち、美術部は 22 名が所属。生徒の中には、社会体育や塾などに通う生徒も多く、普段の活動には 15 名程度が参加。

（イ）活動方針

「社会に生きる美術の場や作品をつくり出す」

⇒日頃から「ここに私たちの作品を飾りたい」という目線を持って過ごすこと「この作品はここに飾りたい」という目線を持って制作活動に取り組むよう指導しており、技能の向上につながっている。地域で学び、学んだことを地域に広げることも大切にしている。

（ウ）活動内容

○令和３年度

絵を額縁に入れて飾る「校内展示」、共同制作活動（美術部旗）、飯田市美術博物館　作品見学、天竜峡写生大会（夏休み）、川路地区文化祭作品展示（川路公民館）、ヘブンスそのはらコラボ「森の中の美術展」

○令和４年度

「校内展示」「共同制作活動（５メートル作品）」、飯田市美術博物館（春草、ワークショップ、現代の創造展）、川路地区文化祭作品展示（川路公民館）、三穂地区文化祭作品展示（三穂公民館）

【ワークショップ活動】

「オリジナル紙コースター作り」をヘブンスそのはら、三穂公民館で実施。

○令和５年度

「校内展示」「共同制作活動（美術部旗）」、飯田市美術博物館見学（春草作品、手塚先生ワークショップ）、豊田市美術館見学（「吹けば風」展、澤田華さんワークショップ）

【ワークショップ活動】

「桜の草木染め体験」（補助）佐倉さま桜まつり（北方地区）

「オリジナル紙リース作り」桜街道桜まつり（龍江地区）

「校区の小学生交流会」ワークショップ（かわらんべ）9/19

「結アート展（障がい者アート展）」ムトスぷらざ展示　９月

（エ）活動を通じて感じていること

「地域で行う活動により循環が起こる」

例１：地域の方に認めてもらうことが、生徒の自己肯定感の向上に繋がる

例２：地域からワークショップ等のオファーがもらえる

例３：謝礼をいただき、豊田市美術館へ行くバス代の一部になった

⇒次の活動につながる（学ぶ機会が増える、新たな目的が生まれる）

（オ）生徒が大切にしていること（生徒の様子から）

・「自分の描きたいこと、やりたいことを実現する時間」の確保。

・仲間とともに、話をしながら、安心感や所属感をもって活動すること。

・「美術」が好き。もっと技能を高めたいという生徒もいるが、いつでも教えられたい訳ではなく、必要な時に教えてほしい。

（カ）顧問として大切にしていること

「社会に生きる美術の場や作品をつくり出す経験をさせたい」

・展示・公開することを前提とした作品つくりを意識させる

・展示の場の確保（→顧問が交渉した場もあった）（校内、地域公民館、ヘブンスそのはら、ムトスぷらざ）
・講義的ではない、「ゆるさ」のある雰囲気づくり
・地域に出る活動を増やす（ワークショップ、美術館ツアー）
⇒飯田市美術博物館との継続的な連携、公民館主事との連携・繋がり
・「やりたいこと」ができる環境づくり（様々な分野の作品制作）
・メディアによる活動の発信（信毎２回、南信州２回、中日１回）

イ　美術部の活動を地域移行していく場合に意識したいこと

・大枠の「目的」「目標」の設定を行う。
（例：社会に生きる美術の場や作品をつくり出す経験をさせたい）
・生徒が「やりたいこと」を実現できる環境づくり。（個別、学年、全員のグループ分けを丁寧にしていく必要あり）
・ある程度の「ゆるさ」（安心感）、「一体感」（⇒所属感）を作り出す。
・目的に合わせ、活動を徐々に生徒と決め出す。（ある程度は指導者からの提案もあり得る。）
※人数が課題

【手塚先生より】

ア　美術系部活動地域連携の現状と課題

・美術系部活が地域と連携することは難しく、現在中学生を巻き込んだ活動はない。竜峡中学校の美術部の活動は特別進んでいる。
・南信美術会では、次世代育成事業として南信美術展にジュニア部門（高校生）を設けて各校の美術部に出品を呼びかけ、作品の発表会を大人と一緒に行っている。高校生が加わることによって美術展に活気が出てくる。
・美術の活動が学校（授業・部活動）の中に収められていて外に出ることがあまりない。
・美術・芸術活動をしている年配の方も「物足りなさ」を感じており、自分たちが楽しかったことを若い世代にも伝えたいとも思っている。

イ　体験機会の創出に向けて具体的な方策として考えられること

（ア）美博での美術部の活動の受入れ
・学校の部活動単位での受け入れを行っているが、顧問の先生の考え方に左右されてしまい、顧問が代わると途絶えてしまう事がある。
（イ）飯田市美術博物館主催「中学生造形教室」
・令和５年度は８名（定員 15 名）が参加している。年６、７回の活動。
（ウ）飯田創造館機能の旧地場産移転の課題と関連させて
・飯田創造館の移転が話題となっているが、

～質疑応答～

（委員）
・昨今、部活動の活動時間が減少しているなか、これだけの活動をどのように実施されているのか。工夫されている点等あれば教えて頂きたい。
・「ゆるさ」というのは大事なキーワードになると思うが、「たるんでいるのではないか」という軋轢を受けることはないか。もし、あるとすればどのように対処されているか教えていただきたい。

（百瀬先生）
・土日の活動は月に１回あるかないか。２時間の部活の中で何をやりたいかを整理したり、イベント等で忙しくなりそうな時だけ土日の部活動をやっていた。ワークショップの手法については、美博（専門機関）に相談し、鑑賞だけでなく、活動のための学びの時間として活用させて頂いたので、

スムーズに活動に繋げられた。
・「ゆるさ」については、これまでの活動がゆるかったので、今の活動内容について、むしろ周囲から褒められることが多い。

（委員）
・「ゆるさ」がポイントになると思う。大人も欲張って用意しないよう、子ども達の希望を聞きながらゆるく準備・手配することがポイントになると感じた。あまり立派なことを並べるのではなく、子どもの側に立って活動していることが百瀬先生の素晴らしいところだと感じた。

（委員）
・個々がやりたいこと、先生がやらせたいことの折り合いをどうやって取っているのかお聞きしたい。

（百瀬先生）
・ワークショップについては、佐久市の岩村田高校や松川村立松川中学校の活動を参考に、地域と繋がる活動をやりたいと思い、それを生徒に伝えた。最初は騙し騙しで生徒に声をかけて始めたが、実際にワークショップを開いてみると上手くいかなかった（声をかけても「時間がないと言って断られる」、説明が上手くできない）。しかし、上手くいかなくて悔しかった経験が生徒の変化に繋がり、２回目、３回目に繋がった。
・個人の活動については、平日の活動については何をしても良いことになっている。生徒達が「今日は勉強をする日」「発表に向けて制作をする日」というのを自然と切り分けが出来ている。

（委員）
・授業もやりながら、これだけ部活動をやっていて先生自身大変ではないか。また、上級生が下級生を教えながらの活動や、先生がたまに指導に入り、地域と結ぶような活動は可能なのか。

（百瀬先生）
・美術部の場合、美術部の指導の傍ら、授業の準備もできるため、負担感はあまりない。地域での活動についても、何回かやるうちに地域の方にも分かって頂けており、打ち合わせが不要になるなど負担感は少なくできている。テニス部の先生等は外でつきっきりで指導しているので大変そう。
・基本的には「学校班」として平日の活動をし、合同練習として月１で活動をするという千曲市の実践事例については、美術部については問題は少ないと思われる。
・むしろ顧問が転勤になった時に活動をどう繋いでいくかを考えていかないといけないと感じる。
・先輩が後輩に教えていくという部分については、運動部は多いかもしれないが、美術部の場合はあまり見られない。

（委員）
・先日、本を読んでいて「部活動は有効な教育活動ではあるが、教育課程ではない」ということを知って衝撃を受けた。そうであるとするならば、やはりもっと授業に力を入れて、嫌いにならないような授業をしっかりと先生がそこでやっていただくのが第一ではないか。そこでも足りなければ、地域に出てより幅広い活動に参加していくいくという風にした方が良いのではないかと感じた。

（賜部活動地域移行支援コーディネーター）
・おっしゃる通り、学校の教える内容は、学習指導要領にある程度規定されている。その中で、部活動は、「学校教育の一環である」という文言があるために、学校の中で行ってきたが、教育課程の中に組み込まれている訳ではなく先生がボランティアとして部活動を支えてきた。ただ、学校教育の一環として、部活動の担っていた役割はかなり大きいものがあったと思われる。先ほどの百瀬先生の話の中でも、所属感や安心感という話があったが、部活動は、教室の授業だけでは感じられない仲間と一緒に取り組む良さや、継続してやり抜くこと等、色々なことを担っていた。こうした部分も大事にしなければならないが、課題の部分も明るみに出始めたており、このままでは立ち行かなくなってきている。学校の先生たちも「授業にもっと集中するべき」というお話もあったが、まさ

にその通りで、授業が第一だが、それ以外にも生徒指導の対応や不登校の生徒への対応等、様々なことが押し寄せてきており、なかなかそこに向かえないということもある。生徒と向き合う時間があまり確保できないというようなこともあり、こうしたことも含めて部活動のあり方を検討していかなければいけない時期に来ているということは間違いない。「部活動だけ変えれば働き方改革になるのか」、「部活動だけ変えれば先生たちが授業に集中できるのか」というとそうではないが、１つのきっかけ（窓口）として真剣に考えていく必要のある問題だと認識している。

（委員）

・現場の先生方はどういう風に捉えられているか。

（賜部活動地域移行支援コーディネーター）

・粋に感じてやっていた先生もいたのではないかと思う。全ての先生ではないが。生徒と同じ気持ちを共有できる場であったのは間違いないと思う。ただ、家庭が犠牲になっていたり、地域活動に参加できなかったりということも起きていたのかもしれない。問題は山積みであると捉えている。

（塩澤座長）

・現役の先生方はどうでしょうか。

（委員）

・吹奏楽部が持てるようになってからは楽しかったが、他の部活動の顧問は負担に感じていた。

・教えたい先生もおそらく大勢いると思う。こうした先生方を地域と連携しながら有効活用していけると良い。全員一律にというのではなく、苦手な先生もいるだろうし、子育てに忙しい時期や年代もあると思うので、柔軟に考えていけると良い。

（委員）

・部活を通して生徒を育てたり、粋に感じていたりする先生もいる。ただ、家庭が大変だという先生もおり、一律にできないというのはその通りだと思う。

（賜部活動地域移行支援コーディネーター）

・「楽しかった」という先生もいるが、６割以上の先生たちが自分の専門でない（経験したことのない）部活動を教えているというデータあり、苦しさを感じている先生も多いのではないかと思う。

（委員）

・（千曲市の事例の）先生方の登録制はすごく良いと思った。先生も残業が減り、得意なことを生かし、そこに子ども達が集まって活動できるというのは一つの可能性として良いと感じた。

（委員）

・百瀬先生の発表は、美術部だけでなく他の色んな部に対しても同じことができるのではないかと感じた。私は科学の体験活動をしており、ある学校の先生に「私たちが毎回来なくても先生たちがやり方を覚えて広めてもらえればいいのでは」という話をしたことがあるが、「それは違う」と言われたことがある。その先生からは、「地域で育ったものを先生が持っていると人事異動してしまうので、そこに根付かない」と言われた。地域にそういう好きな人を育てることで、地域の協力者が現れる。私も地域の人達を育てたいと思って活動してきて、協力者もかなり現れてきている。部活動改革の取り組みは「地域移行」ではなく、「地域で新しいものを育てる」ことだと思っている。なので、先生が関わってくれているうちに地域の人達を育てていただきたい。協力者を育て、それが広がっていくことが重要。

・バスで研修に行った研修に行ったことはすごく立派なことだと感じた。「今やっている勉強のもう一歩先を行きたい」ということで子ども達を外へ連れていったことは素晴らしい。また、自分達でお金を生み出して、それを費用に充てるという考え方も素晴らしいと思った。

・一緒に活動する中学生のボランティアの様子から、中学生は自分のやるべきことが分かっており、子どもでなく、大人に踏み出している。なので、竜峡中美術部のようなワークショップを通じて、

また次のことをやりたいという風にステップアップをしていく様子がすごく分かる。こういった取組が地域に根付くような方向性に持っていただけると嬉しいと感じた。

（塩澤座長）

・私たちが物事を考える時に、つい自分が中学生だった時を基準に考えがちだが、今の中学生・高校生は大人が思いもつかなかったようなすごいこともできる。楽しみでありながら、大人ぶって「ああでもない」「こうでもない」と言っているのも少し違う気もしてきている。

（２）今後の方向性について（賜部活動地域移行支援コーディネーター）

・先日、地域クラブの移行に向けた担当者会議で、長野県から「休日の学校部活動を令和８年度末を目途に地域クラブ活動に移行する」との方針が示された。国は令和７年度末としていたが、長野県は各地域の実情を踏まえ１年猶予を設けた。

・飯田市としては、令和７年度末には休日部活動の地域移行を進め、令和８年度に地域移行した形で動き出せるようにしたいと考えている。平日はできるところから移行を進める。

→補足・意見等なし

（３）グループ協議

【１グループ】

・百瀬先生の発表は素晴らしいと思う。特に「ゆるさ」「帰属意識」（を大切にしている点）。どこかでは繋がっていたいという子は多い。自校以外の生徒も部活動として受け入れてやっていくとしたら、素晴らしいことだと思うが、現在の中学校の生徒の気持ちを考えると難しい面もあると思う。しかしながら、方向性とすると間違いがない方向性だと思う。

・子どもが地域であてにされるというのが良い。この地域のためになんとかしようって思いが出てくる。いい部活（の取組）だと思うが、その部活をコーディネートするのは先生。それを地域でやろうとするとお金がかかる。ボランティアでは「とても無理」で絶対終わってしまう。

・実は土日に部活をやりたくないという先生もいる。土日、例えば登録制になったとしたら、やらない先生もいるかもしれない。

・吹奏楽部は土日の活動を絶対やっている（やりたい先生が顧問をされているので）。美術部は、ほぼやらない。しかし、例えば月に１回とか、月に２回とか、目標立てて制作活動を行うということはありかもしれない。

・今までのような学校対抗の大会について、今は移行期で、学校も地域クラブも大会に参加できることで運用されているが、最終的には地域となると思う。そこのところがはっきりしないのが、地域移行のネックのひとつとなっているような気がする。

・人件費がかからないように安くあげようと思ったらそれは無理。ただ、地域側も受入の課題として高齢化ということもある。

【２グループ】

・異年齢の中で活動することで生徒は成長してく。多様な人と活動できる場をつくっていくことを考えたい。

・吹奏楽や合唱部の大会がある限り、やはり結果を求められるし、生徒が結果を求めようとするのは当たり前である。その意識を変えることは、簡単ではない。学校単位での参加ではなくできるようになっていくとありがたい。合唱は、拠点校部活動からスタートさせたい。

・先生方のなかには、部活動をやりたい先生もいるが、やりたくても子育て等でできない人もいる。兼職兼業を無理なく進めていくことで、学校にある貴重な専門性をうまく活用したい。ただし無理

はさせない。地域の方で見てくださる方がいるとありがたい。

【３グループ】

・（飯田市美術博物館との連携について）竜峡中美術部のように市内の９校から依頼があったとしたら、年１回ぐらいなら受け入れることはできる。
・部活動アンケートの結果を見るに、部活動未加入の生徒が文化系の地域クラブに加入している割合は少ないため、メニュー（活動）を提示するだけでは参加につながらない可能性もあるのでは。
⇒子ども達はメニューを知らないだけなので、活動を知ればそれなりに参加してくれると思う。チラシだけを見て行く子はほとんどいない。参加して楽しかった子が友達を誘って広がっていくといったロコミの力が大きい。そのためには保護者の方にも理解してもらい勧めてもらうことが大切。
・吹奏楽部は土日も活動をしているため難しいかもしれないが、その他の文化部は土日であれば出られる気がする。ただ、文化部の生徒で習い事をやっている子も多い。
・地域移行を進める上で、吹奏楽のようなコンクールでの上位入賞を目指すものと、美術のようにレク的に取り組めるものと両方を一緒に考えていくのは難しい。
・時間外勤務が大変という声もあるが、年間 20 日登校日数を増やせば６時間目の授業分は賄える。毎日５時間授業すれば、部活動をやって４時半に帰れば平日の部活動は勤務時間内に収まるので、移行期間は登校日数を増やすことを考えてはどうか。

（４）アドバイザー　南信教育事務所飯田事務所　内田指導主事より

・本日は部活動の地域移行や地域連携を考える上で大切な話がたくさん出てきた。その中で一番の核になるのは、「子ども達がやりたいことを実現できるか」それを作っていくんだというところが外れていなければ、百瀬先生がやってこられているような活動が地域との連携の中でも作っていけるのではないかと感じた。
・百瀬先生は中学校の先生なので子どものこともよく知っていて、対話の時間も取れる部活動だが、地域の指導者の方が、どのように子どもとの対話の時間を取ったり、子どもの「やりたい」を待ったりをできるかを考えていくことが、指導者の育成のところの課題ではないかと感じた。
・先生の転勤のお話もあったが、先生と地域の方が一緒に関わって活動していくことがあれば、先生とやってきたことを地域の方もよく知っていて、次の先生が顧問になったとしても持続していくようであれば、地域としてのより良い部活動のあり方になっていくのではないかと感じた。部活動の指導を続けたいと思っておられる先生が、いわゆる兼職兼業届を出して、部活動の指導を続けられる、しかも自分の地元の地域でできるという環境があると、みんながとても幸せになっていくのではないかと感じた。一緒に勉強させて頂きながらより良い環境を整えていけたら良い。

文化部活動の地域クラブへの移行に向けた令和6年度の取組（案）

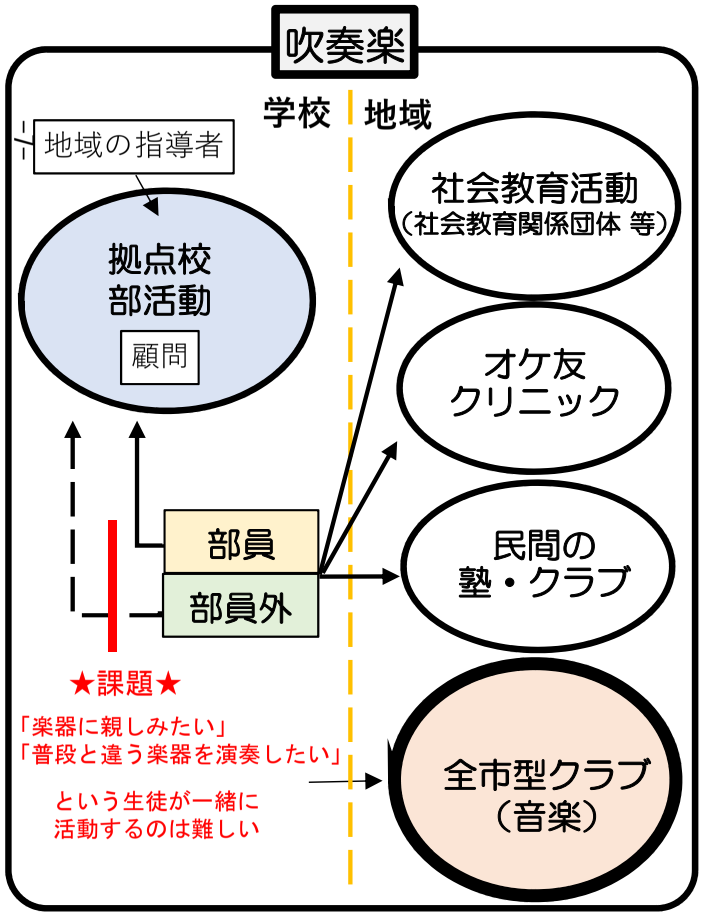
資料１

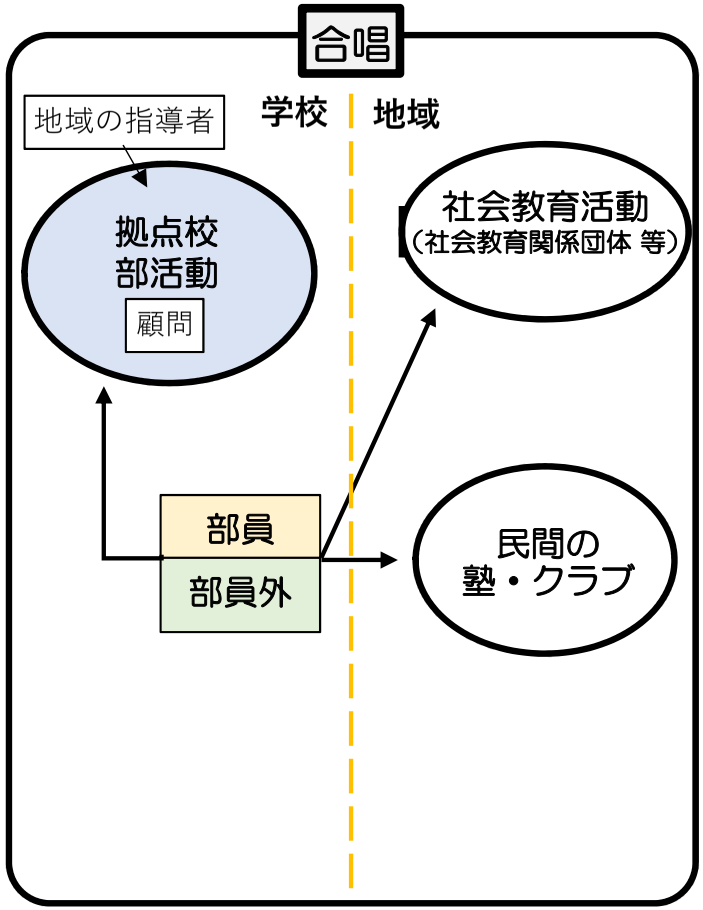
○令和8年度に向けた基本的な考え方
・生徒の選択肢を広げるための取組であり、誰もが参加できる場づくりを進める。
・生徒のための環境整備と合わせて、地域全体の文化芸術・スポーツ活動の振興につなげる。

●令和６年度の取組

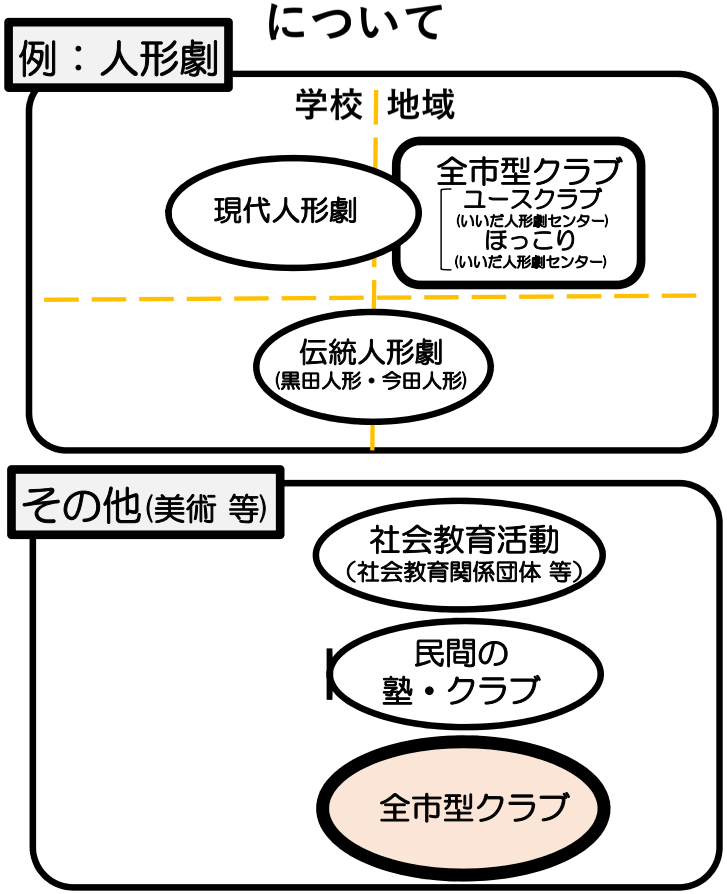
①現在、休日に活動をしている生徒への影響を少なくするため、現在休日に活動のある吹奏楽部と合唱部については拠点校部活動を導入する。顧問の先生に加え、地域の指導者に入ってもらうことで、将来的な地域クラブの運営を担う人材発掘につなげる。
②全市型クラブ（様々な分野にチャレンジできる場）について、現状調査と並行して試行的に実践していく。

●現在休日に活動のある分野





●地域全体の文化芸術の振興について



拠点校部活動エリアモデル

資料２

休日活動のある部活動の令和４年度時点の状況

〇吹奏楽部 ※令和5年度から遠山中は「総合文化部」

	A拠点校																B拠点校												C拠点校							
学　校	緑ケ丘中				竜東中				竜峡中				遠山中				高陵中				飯田東中				飯田西中				旭ケ丘中				鼎中			
学　年	1	2	3	計	1	2	3	計	1	2	3	計	1	2	3	計	1	2	3	計	1	2	3	計	1	2	3	計	1	2	3	計	1	2	3	計
部員数	10	10	15	35	7	7	6	20	12	5	5	22	3	1	2	6	23	8	26	57	5	6	11	22	3	6	15	24	10	19	9	38	6	8	9	23

〇合唱部

学　校	緑ケ丘中				旭ケ丘中			
学　年	1	2	3	計	1	2	3	計
部員数	1	6	1	8	3	5	8	16

⇒既に部活が無くなってしまった学校や、部員数が少ない学校もある。

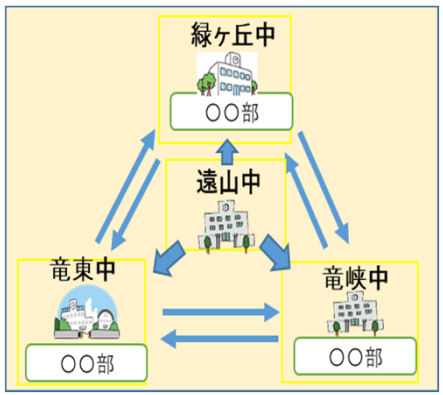
拠点校部活動エリアモデル

●拠点校部活動導入のねらい
- 部活動の無い学校の生徒も他校の活動に参加でき、選択肢が増える。部員数の少ない学校の活動維持につながる。
- 学校単位ではないことが当たり前という意識を醸成することができる。
- クラブへ移行していく際の指導者の確保につながる。

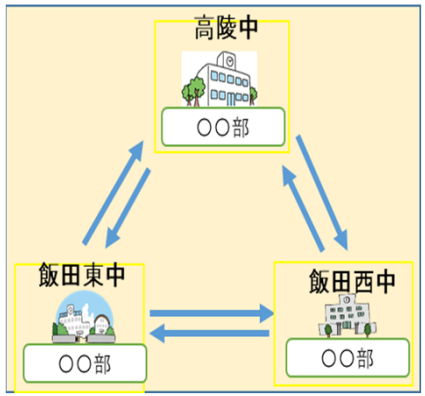
吹奏楽部

A～Cの枠組みを想定。(学校同士で協議し、段階的に導入)

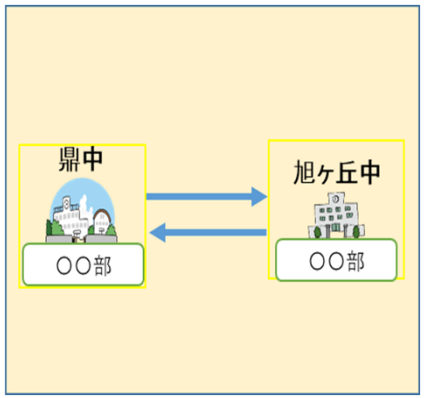
A拠点校⇒Aクラブ



B拠点校⇒Bクラブ

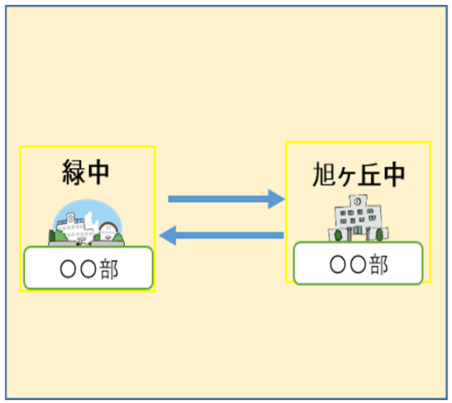


C拠点校⇒Cクラブ



合唱部

旭ヶ丘中と緑ヶ丘中のみのため、２校での拠点校を想定。



全市型クラブ（様々な分野にチャレンジできる場）の検討について

資料３

◆地域活動等の状況◆

○部活動にある分野

分野	部活のある学校数	休日活動	部活動アンケートの回答項目	生徒のニーズ	社会教育機関等の講座・関係団体	社会教育関係団体	民間の塾・クラブ
吹奏楽	8/9	○	吹奏楽	217	○	○	○
合唱	2/9	○	歌、合唱	121	○	○	—
人形劇	7/9	—	演劇、芸術活動（人形劇、人形浄瑠璃、和太鼓、獅子舞）	67	○	○	—
美術芸術	7/9	—	美術活動（絵画や造形）	183	○	○	○
			芸術活動（漫画・イラスト）	208	—	—	—
コンピューターパソコン	4/9	—	コンピュータ関連（プログラミング・動画編集）	296	○	○	○
理科	0/9	—	科学や自然に関する活動（科学）	117	○	—	○
技術	1/9	—	機械や木工などの工作活動（機械）	131	—	○	—
			機械や木工などの工作活動（木工）		—	—	—
家庭科	1/9	—	家庭（調理）	222	—	○	○
			家庭（手芸）		—	○	○

○部活動にない分野で社会教育関係団体の活動があるもの

音楽（器楽、太鼓）、歌（カラオケ、民謡）、ダンス・舞踏（ダンス、フラダンス、社交ダンス）、演劇、自然、歴史、人文、伝統文化・芸能、無線、写真、競技かるた　等

試行的に実施

R5.11～R6.1
ジブンチャレンジ期間

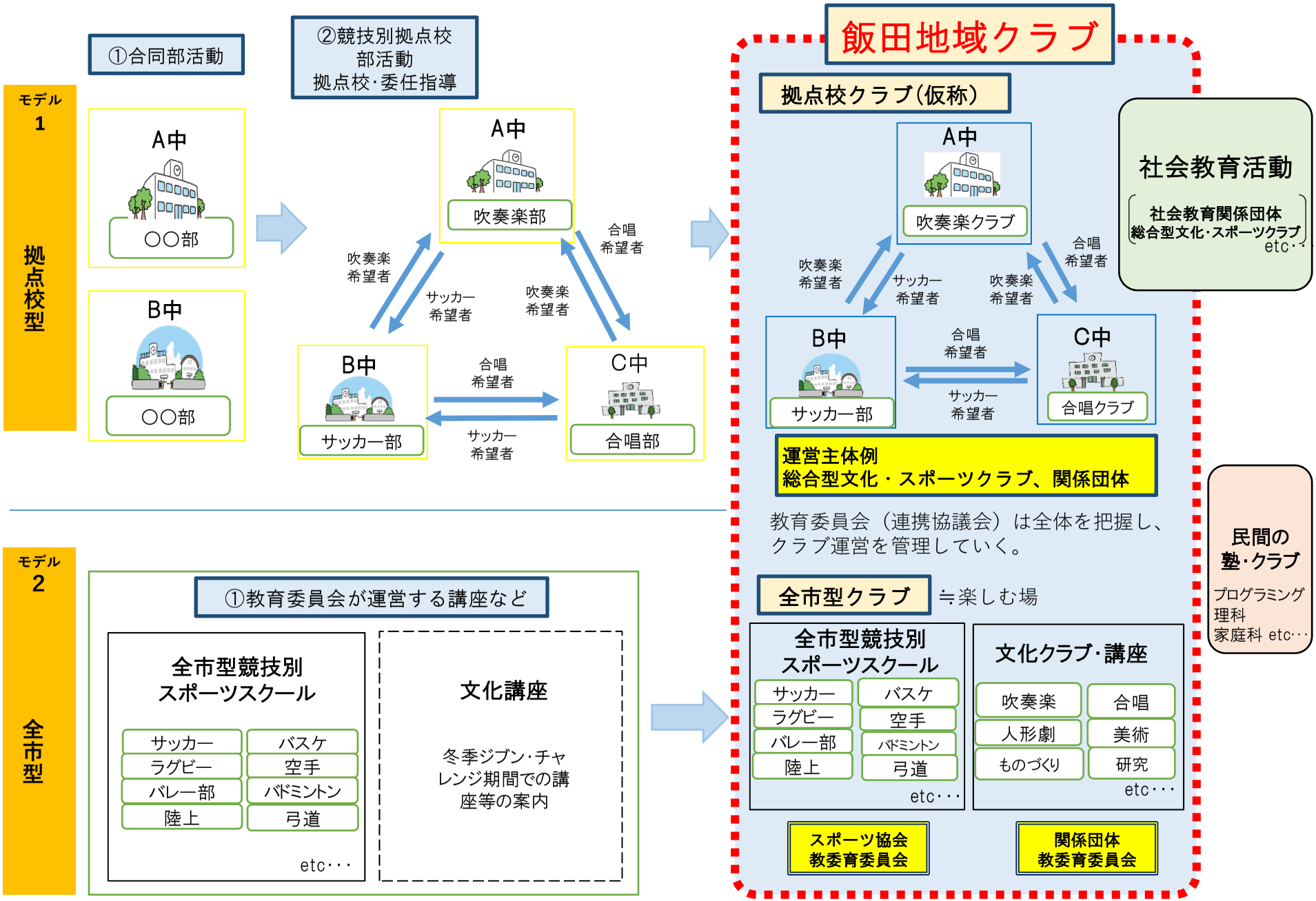
○ステップ1（R5末～R6前半）
現状調査
- 民間の塾・クラブの活動調査
- 社会教育活動の把握（社会教育関係団体への中学生との活動に関しての意向確認）
- 中学生のニーズ調査
  （部活動アンケート「求めるレベル・内容」、「希望する曜日・時間帯」等を追加し、より詳細なニーズ把握を図る。 2月実施予定）

○ステップ2（R5末～R6前半）
中学生のニーズとの比較・分析・検討

○ステップ3（R6前半～R6中半）
全市型クラブの開設

飯田市の目指す移行モデル

資料４



スポーツ庁・文化庁からの提言

参考資料１

令和４年12月

学校部活動及び新たな地域クラブ活動の在り方等に関する総合的なガイドライン【概要】

○ 少子化が進む中、将来にわたり生徒が**スポーツ・文化芸術活動に継続して親しむことができる機会を確保**するため、**速やかに部活動改革に取り組む必要**。その際、生徒の自主的で多様な学びの場であった部活動の**教育的意義を継承・発展**させ、**新しい価値が創出**されるようにすることが重要。
○ 令和４年夏に取りまとめられた部活動の地域移行に関する検討会議の提言を踏まえ、**平成30年に策定した「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」及び「文化部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」を統合した上で全面的に改定。**これにより、学校部活動の適正な運営や効率的・効果的な活動の在り方とともに、**新たな地域クラブ活動を整備するために必要な対応について、国の考え方を提示。**
○ 部活動の地域移行に当たっては、**「地域の子供たちは、学校を含めた地域で育てる。」**という意識の下、生徒の望ましい成長を保障できるよう、**地域の持続可能で多様な環境を一体的に整備**。地域の実情に応じ生徒の**スポーツ・文化芸術活動の最適化を図り、体験格差を解消**することが重要。

※**Ⅰは中学生**を主な対象とし、**高校生**も原則適用。**Ⅱ～Ⅳは公立中学校の生徒**を主な対象とし、高校や私学は実情に応じて取り組むことが望ましい。

Ⅰ　学校部活動

教育課程外の活動である学校部活動について、実施する場合の適正な運営等の在り方を、従来のガイドラインの内容を踏まえつつ示す。

（主な内容）
- **教師の部活動への関与**について、法令等に基づき**業務改善や勤務管理**
- **部活動指導員**や外部指導者を確保
- 心身の健康管理・事故防止の徹底、体罰・ハラスメントの根絶の徹底
- **週当たり２日以上の休養日**の設定（平日１日、週末１日）
- 部活動に強制的に加入させることがないようにする
- 地方公共団体等は、スポーツ・文化芸術団体との連携や保護者等の協力の下、**学校と地域が協働・融合した形での環境整備**を進める

Ⅱ　新たな地域クラブ活動

学校部活動の維持が困難となる前に、学校と地域との連携・協働により生徒の活動の場として整備すべき新たな地域クラブ活動の在り方を示す。

（主な内容）
- 地域クラブ活動の運営団体・実施主体の整備充実
- **地域スポーツ・文化振興担当部署や学校担当部署、関係団体、学校等の関係者を集めた協議会**などの体制の整備
- 指導者資格等による質の高い指導者の確保と、**都道府県等による人材バンクの整備、意欲ある教師等の円滑な兼職兼業**
- 競技志向の活動だけでなく、**複数の運動種目・文化芸術分野など、生徒の志向等に適したプログラム**の確保
- 休日のみ活動をする場合も、原則として**１日の休養日を設定**
- 公共施設を地域クラブ活動で使用する際の負担軽減・円滑な利用促進
- **困窮家庭への支援**

Ⅲ　学校部活動の地域連携や地域クラブ活動への移行に向けた環境整備

新たなスポーツ・文化芸術環境の整備に当たり、多くの関係者が連携・協働して段階的・計画的に取り組むため、その進め方等について示す。

（主な内容）
- **まずは休日**における地域の環境の整備を着実に推進
- **平日の環境整備はできるところから**取り組み、休日の取組の進捗状況等を検証し、更なる改革を推進
- ①市区町村が運営団体となる体制や、②地域の多様な運営団体が取り組む体制など、**段階的な体制の整備**を進める
  ※地域クラブ活動が困難な場合、合同部活動の導入や、部活動指導員等により機会を確保
- **令和５年度から令和７年度までの３年間を改革推進期間**として地域連携・地域移行に取り組みつつ、地域の実情に応じて**可能な限り早期の実現を目指す**
- 都道府県及び市区町村は、方針・取組内容・スケジュール等を周知

Ⅳ　大会等の在り方の見直し

学校部活動の参加者だけでなく、地域クラブ活動の参加者のニーズ等に応じた大会等の運営の在り方を示す。

（主な内容）
- 大会参加資格を、**地域クラブ活動の会員等も参加できるよう見直し**
  ※日本中体連は令和５年度から大会への参加を承認、その着実な実施
- できるだけ**教師が引率しない体制の整備**、運営に係る適正な人員確保
- **全国大会の在り方の見直し**（開催回数の精選、複数の活動を経験したい生徒等のニーズに対応した機会を設ける等）

部活動地域移行を見すえた『めざす姿』と取組の全体像

参考資料２

★取組の目的

中学生が、ウエルビーイングを感じながら、地域の中で、主体的に様々な文化芸術・スポーツ活動に取り組むことを通じて、心身の健やかな成長と豊かな社会性を育む

1 生徒がやりたい文化芸術・スポーツをできる地域環境をつくる
2 生徒が文化芸術・スポーツの楽しさを実感できる場をつくる
3 生徒が生涯にわたり文化芸術・スポーツに親しむ意識と習慣を育む
4 高い技能レベルをもつ生徒を地域で育む

★Ｒ１からこれまでの取組　　＜取組の前提＞学校教育と社会教育との連携による取組

地域移行に向けた土台づくり

学校教育

・部活動方針の遵守
・生徒が主体となる部活動　等

1 生徒の主体性を基軸とした活動（冬季・ジブンチャレンジ期間）
2 良好なコミュニケーションでつながるチームづくり（筑波大学ADとの研修会等）
3 文化芸術・スポーツ活動時間の適正化（部活動総時間数　665時間→430時間）
4 心身の成長を支える指導の適正化（指導者の心得6か条・筑波大学ADとの研修会）

社会教育

・全市型競技別スポーツスクール
・指導者研修会　等

・部活動地域移行→中学生のためのより良い文化芸術・スポーツ活動の場を地域ぐるみでつくっていく　≠　これまでの部活動

従来の部活動をそのまま移行するものではない

・大切にしたいこと「部活動の意義：異年齢との交流における人間関係の構築、自己肯定感や責任感、連帯感の育成」「指導者の心得6か条」

「子どものため」をアップデートさせよう
・一つのことに脇目もふらず　⇒　多様な経験、多様な人との出会い
・長時間練習による能力の向上　⇒　科学に基づいた効率的な練習による能力の向上

★Ｒ５～　＜部活動地域移行＞
今後の中学生の活動イメージ

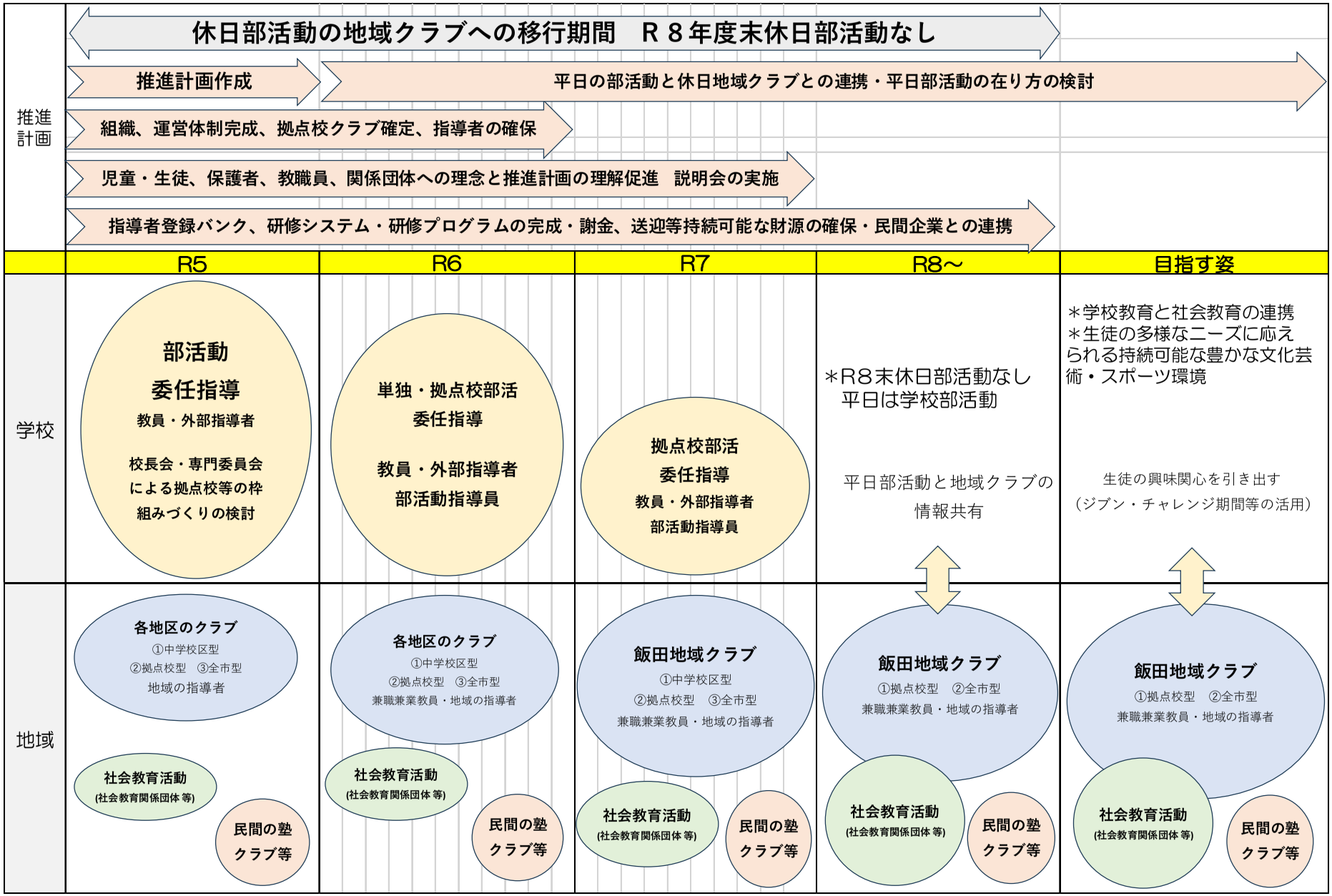
＜中学生の志向＞
✔文化芸術・スポーツを楽しみたい
✔多様な種目を楽しみたい
✔特定種目の技能、競技力を高めたい

主体的な参加

★中学生の主体的な活動の場＝地域の単位

1 中学校区・・・歩いて行ける身近な活動の場
【総合型地域スポーツクラブ・地区サークル】
2 全市・・・多様なレベルやニーズに応じた活動の場
【全市型競技別スポーツスクール(R1～先行実施)、スポーツ協会、民間クラブ】
3 飯田下伊那・・・希少種目や限定的な指導者による活動の場(相撲、ラグビー等)

★中学生が文化芸術・スポーツを楽しめる環境づくりのための連携協議会の設立　（文化部会とスポーツ部会）
文化芸術・スポーツ分野の関係者が集い、中学生期の現状や課題について意見交換し、今後の方向性を協議する

休日部活動の地域連携・地域クラブへの段階的な移行イメージ

参考資料３